

歌の周辺

昭和55年の作。歌集では、この歌の前に「国政を派閥が支へかつ侵すかかる日本にわがたのします」という歌がある。これは国政を担う政党が、国民のためでなく自分たちの派閥のための行動をしていることに対する怒りを詠んでいる。その怒りを鎮めるために、心を和ませてくれる光景を思い浮かべて詠んだのが、このタンポポの歌であろう。いつかどこかで見かけた純真な子供たちの遊ぶ姿を、より楽しく、より童話的に詠みたくて、「種さげてタンポポの白い気球が通る」と歌ったのだらうと思う。

(高野公彦)



(写真・木畑紀子)

高野公彦うた紀行・36

泥あそびする子の上を種さげてタンポ
ポの白い気球が通る

— 『淡青』

【鑑賞】暖かい春の日差しに包まれて泥遊び
しているのは、身の丈二、三センチほどの小
人だろうか。そよ風に吹かれて子らの頭上を
タンポポの綿毛が通ってゆく。綿毛は子らの
目には大きな大きな白い気球のように見え
がちがいない。気球は白い糸を垂らし、その
先に種族保存のための大きな茶色い種を大切
に下げている。穏やかな春の風に乗って気球
はどこまでゆくのだろう。(朝比奈美子)



ふるさとコレクション——207

ふうけつ 風穴（長野県小諸市）

長野県小諸市布引山の麓に氷という区（集落）がある。この区には天然の冷蔵庫といわれる風穴群がある。自然の冷気を利用すべく石を積み2～5米の深さの穴倉を造り屋根をのせた天然の大きな冷蔵庫である。この歴史は古く、江戸時代には水を貯蔵し藩主に献納した記録が残っている。池からの天然水を切り出し風穴で貯蔵する作業はその後も続けられ、なんと昭和60年頃まで行われていた。

風穴が最も活用されたのは主に明治・大正で蚕の卵＝蚕種の保存に使われ全国からたくさんの注文を受けたという。この頃は全国に三百基の風穴があったが、小諸は群を抜いて全国一の実績があったと記録されている。

温度は年間ほぼ一定で1～2度である。筆者も四季を通して訪れてみたが真夏で2度、真冬で1度だった。不思議この上ない。最盛期には14基あったが現在は5基残っている。養蚕が下火になってからも酒・農産物・漬物・出荷用の花・りんご等の貯蔵に使用され令和の現在も2基が稼働していて希少な風穴である。

大自然の恩恵と人々の知恵と労力が成した風穴は、小諸のふるさと自慢のひとつである。

（写真提供：小諸市 解説：手塚寿々枝）